

雪華慧太
Yukihana Keita

召喚軍師の デスゲーム

～異世界で、ヒロイン王女を無視して
女騎士にキスした俺は！～

3



アイリーネ・フィーリア・ドラグリア

新生ドラグリア王国の女王。
清楚で儼然な容姿だが、
芯の強さは父親譲り。

リーア・リグナ・アルドリア

アルドリア王国の
第一王女。妖精のような
美少女だが、小さい胸に
コンプレックスを感じている。

テネブラエ・ゼレスティス

千年前、神殺しを行った
五人のハイエルフの一人。
恐ろしい野望を秘め、
敵国の皇帝の
背後で暗躍する。

ミルダ・リュゼリア

赤い髪の魔女として
知られるハーフエルフ。
アルドリア王国の
宮廷魔道騎士団長を
務めている。

ミルファール・リュゼリア

外見は妖精の姿だが、
ミルダの母親で
上級精霊。
ハルヒコを異世界に
召喚するのに
一役買った。

ルビア・アルファイラ

アルドリア王国の聖騎士団長。
大陸屈指の剣の腕と美貌から、
アルドリアの薔薇と
呼ばれている。

春宮龍音

主人公ハルヒコの父親で
謎の凄腕剣士。
異世界の秘密を握る
キーパーソン。

ヨアン・アルリード

アンファル王国の王女。
スピードを重視した刀での
戦闘を得意としている。

春宮俊彦/ハルヒコ

本編の主人公で、
天才的なゲームの腕の持ち主。
異世界に召喚されて、
滅亡寸前のアルドリア王国の
軍師となる。

プロローグ

千年前――。

「これがヴェリタスか……。一体どのようにしてこんな物を作ったのだ。我らエルフとて、これほどの物を作る技術はない」

思わずそう呻いたのは、まだ年若いエルフの騎士である。

天空に届くかのごとく聳え立つ白い塔は、圧倒的な威圧感をその場にいる者達に与えていた。傍に
にいるだけで、建物の質量に押し潰されそうになるほどだ。壁面は博識なエルフ達すらも目にした
ことのない素材で出来ており、塔自体が一つの生物のように淡い光を発している。

「まるで鼓動しているみたいだな。古に滅んだ竜族の遺跡とは聞いているが、この建物自体が生
命を持ち、息をしていると言うべきか」

辺りに整然と列をなす千名近いエルフの騎士達を束ねる女が、重々しく感想を口にした。

エルフの王国であるリーシスの魔道騎士団長、エリス・マーティエルである。

エルフ特有の黄金の髪が、塔から溢れる空気に靡いている。整った鼻梁に涼しげな瞳。その凛々しさに騎士達は思わず見惚れた。

エリスの瞳は塔の入口に当たる巨大な扉を見つめている。

副官であるミルト・シルトアが口を開いた。

「エリス団長、やはり我らも国王陛下と共に塔の中に入るべきだったのでは？」

国王陛下とはファシアス・ゼノン。偉大なるエルフの王と呼ばれる男である。

ミルトはそう進言したが、エリスは静かに首を横に振った。

「ファシアス様が我らにここで待つようにと命じたのだ。おそらくは、我らでは足手纏いにしかならぬのだろう」

ミルトはエリスの言葉に目を見開く。

「馬鹿な！ 栄光あるリーシスの騎士団長であられるエリス様でさえ、戦力にならないというのですか？ そんな、まさか……。一体このヴェリタスには何があるというのです!?」

美しい騎士団長はミルトの言葉を受け、塔を見上げた。

「分からぬ。だが陛下はあの男だけは連れて入られた。一体何者なのだ……。あのテネブラエという男」

「エリス様。私はあの男を信用できません。国王陛下のご様子が少しずつおかしくなっていたのは、三年前にあの男が現れてからです」

エリスは白く巨大な塔を見上げる。

「テネブラエ・ゼレステイス。奴は一体何処からやって来たのだ。あれほどの力を持つ男が、突然現れるなどありえぬ。それに王妃陛下のあの白い翼だ、あれは一体……」

エリスは、背後に停まっている白く美しい馬車の方へ目をやって言った。

ミルトは頷く。

「奇跡の翼、民はエルティシア王妃陛下のあの白く美しい翼をそう呼んでいます。確かにあの翼の光が、死を待つものの病人達を癒やすのをこの目で何度も見ました。ですが近くでお仕えしておりますと、あれはエルティシア様の命を奪うものに思えてなりません」

「テネブラエは、あれをファシアス様が神となる前兆だと申しているが、私にはそうは思えぬ。あの翼が生えて以来、王妃陛下のお体は弱られる一方だ」

エリスはそう言うと、唇を噛み締めた。

「人間や獣人共の勢力は次第に増している。数で及ばぬ我らエルフは、いずれ辺境の地に追いやられよう。陛下は自らが神となれば、全てを解決できると信じておられる。何より王妃陛下の命を救えると……。その為に、この禁断の聖地と呼ばれたヴェリタスまで軍を進めて来たのだからな」

ミルトはエリスに尋ねた。

「エリス様、いくらファシアス様といえど、我らエルフが神になどなれるものなのでしょうか？」

「……」

エリスは、指先で腕の手首に結ばれた鮮やかな色の組紐をなぞる。

ミルトはそれを見て目を細めた。

「ミルファール様がお作りになられた守り紐ですな、我の手にもございます。ミルファール王女殿下はお優しい。兵士一人一人に自ら編まれたこの紐を授けて無事を祈り、笑顔で見送ってくださいました。あのお方は、我らを照らす光のごときお方です」

「幼い頃から不思議と私に懐いてくれた。エリス、エリスと私の名を呼んで。今ではすっかり大人になってしまわれたが、私にとってはいつまでも幼き頃のあのお方のままだ。全てが杞憂であればよいのだが……。神になどならねず、たとえ僻地に追いやられたとしても、ファシアス様とエルテイシア様のもとで微笑むミルファール様が見られれば私はよいのだ」

ミルトはエリスの言葉に深く頷く。

「この地に何があるにせよ、皆無事で帰りたいですな。ミルファール様の笑顔が早く見たいものです」

エリスは瞳を閉じると楽しげに微笑んだ。

「ああ……。あのお方の無邪気な笑顔を見ると、戦いに満ちたこの世界の現実も忘れられる。

そして、こんな不条理な世界を作った神のことさえ、許せるような気がする」

エリスの手はしっかりと守り紐を握り締める。

その時、騎士団の数名の兵士達が声を上げた。

「な！ 何だあれは!!」

「空を見る！ あれは!？」

その声に促されて、エリスとミルトも天を仰いだ。

塔の上部から、黒い雲に似たものが地上に向かって来る。

(あれは、もしや！)

恐ろしい魔獣の叫び声が大気を振動させた。

エリスの耳には巨大な何かが羽ばたきながら、こちらにやって来る音が聞こえた。徐々にその形がはっきり目視できるようになる。

エリスの瞳が光を帯び、強大な魔力がその手に満ちていく。

「全軍、構えよ！ 迎え撃つぞ!!」

ミルトは剣を構えて低く唸った。

「ワイバーンだ?! しかもこの数は一体！ 信じられん、数百はいるぞ!!」

太古に滅んだと言われる高位の竜族とは違い、未だに生き残っている知性を持たない小型の飛竜。それがワイバーンである。

数頭の群れなら深い溪谷などに棲息しているが、これだけの大群は通常ならばありえない。不気味な鳴き声を上げながら、モスグリーンの巨体が次々とエルフ達の方に向かって降りて来る。体表を覆う鱗が、太陽の光を浴びて鈍く輝いていた。

素早くエリスは呪文の詠唱を始める。

「我命ず、疾風の化身にて大いなる大気の精霊よ。集いて我に仇なす敵を切り裂け！ グラディウス・アーエル!!」

魔力によって輝きを放つエリスの体から、鋭い風の刃がワイバーンの群れに向かって放たれた。攻撃を開始したのは彼女だけではない。天空から襲い掛かる飛竜の群れに、騎士団の兵士達が一齐に魔法を打ち出していく。

大地は、切り裂かれたワイバーン達の血でみるうちに赤く染まった。生臭い体液の臭いが、血に飢えた魔獣達の一団をさらに凶暴化させる。

地表へ落下した仲間を、感情のない黒いガラス玉みたいな瞳で追いながら、ワイバーン達は下降を続けていく。

——次の瞬間。

ミルトは前方の数名の兵士達がかき消されるように、その場から忽然と姿を消すのを目撃した。
「ぐああああ!!」

ワイバーンが恐るべき速さで飛来し、瞬く間に上空へ舞い戻ったのだ。その顎には、無残な仲間の騎士の体が啜えられている。
周囲に血しぶきが飛び散った。

「いかん!!」

ミルトは自らも魔法を放つ。だが、騎士団の魔術の弾幕が手薄な場所から、ワイバーンの群れが雪崩を打って地上に降り立つと、エルフの騎士達にその爪を振るった。

さらにエルフの柔らかい体に、ワイバーンの鋭い牙が容赦なく食い込む。
これに対抗するエルフ達の強力な魔法の一撃が、ワイバーン達を一体、また一体と物言わぬ肉塊へと変えていった。

——引き裂き、喰らい、屠られる。

その光景は、悪魔的才能を持つ画家が描いた地獄絵図のようだ。双方の断末魔が、空と大地に響いている。

ミルトは叫んだ。

「ひるむな！ 打ち続ける!!」

（いかん、とても持たぬ!!）

エリスは危機を察した。このままでは直に騎士団は壊滅するだろう。

「ミルト、少しでも持ちこたえよ」

エリスの低い声に、ミルトは魔道騎士団長の悲壮な覚悟を読み取った。

「エリス様、何をなさるおつもりです!？」

凜々しきエルフの体に膨大な魔力が集まっていくな。全身を破裂させんばかりの凄まじいエネルギーだ。エリスは恐るべき精神力で、今にも暴走を始めようとする魔力を抑え込みながら、それを体内に蓄積し、徐々に圧縮させていく。

「それは、自爆魔法！ やめてください団長!!」

己の命を引き換えにした途轍もない魔力の解放――。

そんな禁術を使えばどうなるか。その結果を最も理解しているのは術者だろう。限界を遥かに超えた術者の肉体は、熟した果実が弾けるように四散するのは避けられない。

エリスは天高く自らの剣を振り上げた。

あらゆるものを破壊する冒瀆的な力が、その剣先に凝縮されていくのがミルトには分かった。副官がこよなく敬愛する団長は、己の命を犠牲にしてこの窮地を脱するつもりなのだ。

「さらばだ、ミルト！」

手にした剣が砕け散り、命を懸けた極限の魔撃が放たれる瞬間。

白い馬車の中から女の声がした。澄み切った水晶を思わせる透明感のある美しい声だ。

「おやめなさい、エリス」

馬車の扉が開いて人影が現れる。煌くブロンドの髪と黄金の瞳。

天上の美の女神すらも、この女の姿を目にしたならば、嫉妬のあまり正気を失うかもしれない。

エルティシア・リユーゼリア。

エルフの王、ファシアス・ゼノンの妻である。

知能が低いはずのワイバーン達が皆、水を打ったように静まり返ってエルティシアを凝視しているというより、彼女の背中に生えた白く輝く翼の神々しさに釘付けになっていると言わべきか。さらにその翼が、花びらみたいに白い羽を空に舞わせていた。

エリスは、エルティシアの体と翼から溢れる魔力を感じて叫んだ。

「いけません、王妃陛下！ それ以上その力を使ってはならぬとファシアス様が！」

エリスの言葉通り、王妃の美貌は青ざめている。死に繋がる病を背負っている証だろう。

「良いのです、エリス。忠義を誓う貴方達を見捨ててまで、生きるなど愚かなことです。それに貴方が死ねば、あの子が悲しむでしょう。もし私に何かあった時はエリス、ミルフアールを頼みましたよ」

「エルティシア様……」

王妃のその言葉に、エリスの目には涙が浮かんだ。
エルティシアの唇が開いて、辺りに歌が響き渡る。

とても美しい歌声が――。

その場にいるエルフとワイバーン、全ての生き物達が、ただその歌に魅了され心を奪われていく。
やがて白い光が、エルティシアを中心にドームを描きながら輝きを増し広がっていった。

エルフ達は口々に叫ぶ。

「こ、これは」

「信じられん、傷が塞がっていく!」

驚くべきことに、その光がエルフの騎士達の傷を癒すと同時に、ワイバーン達の黒いガラス玉に似た目に、微かな知性を宿らせていくではないか。

「『ギィギヤ』」

ワイバーン達は、いつしか命令を待つ忠実な僕のようにエルティシアを見つめながら、彼女の周囲に集まって来た。白い翼を持つエルフを女王と崇めているらしい。

エルティシアは彼らに対して静かに命じた。

「お行きなさい。お前達の帰るべき場所へ」

人の言葉を解さぬ凶悪な獣として、ただ無秩序に暴れるだけだったワイバーン達が、一斉に翼を広げた。

「『ギィギ、クケーン!』」

ワイバーン達は一声大きく鳴くと、大空に羽ばたいた。その翼が作り出す風が、エリスの頬を撫でる。次第に、ワイバーン達は雲の中に消えていった。

それを眺めながらエルティシアはその場に崩れ落ちる。

「うう……」

エリスはすぐに駆け寄って、その体を抱き上げる。気を失っている王妃を抱いてエリスは叫んだ。
「ミレティス! 何をしている、王妃陛下が!!」

エリスの声に応じて、馬車の中から一人のエルフが姿を現した。エルティシアには及ばないものの、美しい神官姿の女である。

その顔は苦悩と苛立ちに満ちていた。

「分かっているでしょう……。もう無理よ、エリス。私だってやれることはやったわ。治療は続けてきたけれど、これ以上は私の力ではどうすることも出来ない」

ミレティス・ディアトリス。

エリスの幼き頃からの友で、共に魔術を学んだ仲間。リーシスの神を祭る神殿の神官長である。

彼女は、ゆっくりとエリスに歩み寄りながら口を開く。

それから気が触れたように笑い出した。目の前の高貴な存在を救えない己自身を嘲っているのだ。「私には、数年前から何故か神々の声が聞こえなくなっただわ。王妃陛下の背中にこの白い翼が生えたのも丁度その頃。やはりテネブラエ様の言う通りなのよ。これはファシアス様が……。いいえ、我らエルフ族の中から神が生まれる前兆。もしそうなら、私はきつとその一翼を担ってみせる。新たな神々の一人としてね」

エリスは、友のその言葉に怒りを露わにした。

「ミレティス、お前はあの男に何を吹きこまれたのだ！ ……知っているのだぞ。神官でありながら、お前があの男と夜を共に過ごしていたことも」

ミレティスの目に殺気が宿る。

「何がいけないの！ 神はもう私に答えてはくれない!! このままではエルフは、鼠のように増え続ける人間や獣人どもに征服される！ 数に圧倒されて魔力を使い切り、捕らえられたエルフの女がどうなるか……。あんな悍ましい生き物達の玩具にされるぐらいなら、私は何だってするわ!!」

長寿である代わりに、エルフが子供を授かることは少ない。魔力が強大であっても、圧倒的に数が勝る人間や獣人族によって、いまやエルフは存続が脅かされていた。

女のエルフは捕らえられれば、ハーフェルフを産む道具にされる。ミレティスやエリスのような美しく魔力の高いハイエルフがどんな運命を辿るのか。それはエリスにも分かっていた。

ミレティスの目に、狂気の色が宿る。

「見てエリス。王妃陛下のこの美しい翼、これが我らエルフが神となる前兆でなくて何だというの？ ……殺すのよ。神になって、あの悍ましい連中を皆殺しにするの!!」

「ミレティス……。お前、それは何だ！」

エリスは、怯えながら自分自身を抱きすくめる友の背中に、黒く大きな翼が広がっていくのを見た。

王妃エルティシアとは対照的な、漆黒の綺麗な翼。

凄まじい魔力がそこから放たれている。ミレティスの瞳が赤く染まっていた。

「ふふ、殺すのよ、エリス。皆殺すの……」

「一体どうしたのだ!? ミレティス！ お前!!」

ミレティスの瞳が真紅に輝いていく。

『コロスノヨ……。ミンナ』

（ミレティス？ いや違う、何者だ!? こいつは！）

エリスは剣を構えた。

ワイバーンとの闘いで生き残ったエルフの騎士達も、ミレティスの変貌(へんまう)に気がついて動揺(どうよう)の声を上げる。

「何だあれは！」

「あれは！ ミレティス様か!？」

「あの黒い翼は一体何なのです、エリス様！」

ミルトはエリスを守るように前に進み出る。

「エリス様！ ミレティス様のあの姿は一体」

「ミルト……。あれはミレティスではない！」

エリスは呻くように言うと、黒い翼を大きく広げていく女を睨(にら)んだ。

「何者だ、貴様！ ミレティスに何をした!!」

そう叫んだエリスの体に無数の黒い影が広がっていく。影がミレティスの背から伸びる黒い翼だ。ようやく気づいた時には、周囲は静寂(せいじく)に満ちていた。

エリスの部下の騎士達は皆、その影に切り裂かれた。副官のミルトでさえ地に這いつくばり、光を失った目でエリスを見上げている。

流れ出す血が、ヴェリタスの白い敷石(しきいし)を染めていった。

(何だ……？ これは一体何なんだ……！)

杳然(ぼうぜん)と辺りを見渡すエリスの目に映ったのは、まさに地獄だった。

真紅(まこう)の血溜まり(ちだまり)の中に、エリスはただ一人立ちすくんでいた。エリスは、時が止まったかと思っ

音もなく黒い翼を羽ばたかせて、女がエリスの前に舞い降りる。

まるで神さえも恐れぬ悪魔のように。

その口が、赤い三日月状(みかづき)に開いた。笑っているのだ。

漆黒の翼がエリスを抱きかかえ、ゆっくりと覆っていく。それはエルフの女騎士の体にじわじわと食い込んでいった。

「お前は、一体何者だ……。こ、このヴェリタスとは一体何なのだ」

その生き物は、不気味な笑みを浮かべながら意識を失いかけているエリスを眺めていた。

そして赤い口から言葉が発せられる。

『知りたいかエルフよ。神を殺すための遺跡、それがヴェリタスだ』

エリスの目が最後に見つめていたのは、自分を包み込んでいく漆黒の闇だった。

第一話 封印された記憶

ドルメルが率^{ひき}いる黒帝師団^{こくていしだん}が帝都を出た後――。

帝都パレストシアの地下神殿の前には、かつてのハイエルフにして上級精霊のテネブラエと、エルフの神官長ミレティスが立っていた。

「知りたいかエルフよ。神を殺すための遺跡、それがヴェリタスだ」

ミレティスは目の前にいる男が発したのと同じ言葉を、千年前に自分がエルフの騎士団長エリスの前で口にしたことをはつきりと思い出した。

ミレティスの脳裏^{のうり}に、恐ろしい記憶が蘇^{よみがえ}る。

真実の塔、ヴェリタスでの千年前の記憶。

あたかもそれが、ミレティスの記憶の封印を解^とくカギだったかのように。

同時に目の前に立つテネブラエの胸に広がっていく黒い痣^{あざ}が、竜の罅^{あき}に似た形を帯びていった。

「くくく、思い出したか、ミレティス。千年前、お前が何をしたのかを」

「そんな、嘘^{うそ}よ……。私が、エリスを！」

ミレティスは何度も嘔吐^{おうと}した。

友の体を、躊躇^{ためら}いもなく切り裂いていく記憶と感觸^{かんしよく}が全身に蘇^{よみがえ}っていく。

「違う！ あれは、ワイバーンの群れがやったのよ……。私じゃない」

自ら発したその言葉が、虚ろな偽りであることを、もはやミレティスも分かっていた。

千年前、精霊王と目の前のこの男がああ巨大な塔の扉から出てきた時、その地にいたエルフの騎士達は全て死んでいた。

強い力を持つハイエルフの騎士団長エリスまでも。

何も覚えておらず、呆然と立ち尽くしていたミレティスの前には、王妃エルティシアが氣を失ったまま横たわっていた。

美しい白い翼に、おびただしい数のエルフの死体、それと数十頭のワイバーンの死骸^{しががい}。

全てはワイバーンの仕業^{しわざ}とされていたはずだった。

再び激しく嘔吐する。

「おえええ!! うああああ!!」

自らの背中に生えていた何かが、同胞達の肉体をずたずたにしていく生々しい感覚。

あるはずのない黒い翼、その悍ましい記憶が蘇^{よみがえ}り、美しいエルフの神官は惨めな四つん這いの体勢になって吐き続ける。

その朦朧とした意識の中で、ミレティスはある結論に至った。

——この男はテネブラエ様ではない！

ミレティスがそう確信した瞬間——。

激しい怒りの炎がミレティスの瞳に灯り、強烈な稲光がその手から放たれた。

それがテネブラエの体を焼き尽くしたかに見えた。ところが——。

「お前は、何者だ!? ……テネブラエ様をどうした!」

「お前の愛する男か? そんな男は、とうにこの私の器としての役割しか果たしておらん。千年前からな」

かつて、この地に集った五人のハイエルフ。千年前、この扉を開き神と呼ばれるほどの力を得た上級精霊。彼らに匹敵する力を持つ、エルフの神官長ミレティスの目が鋭く光った。

恐ろしいほどの魔力が、妖艶な女エルフの体から溢れている。

「ほう、精霊王にこの地を任されるだけはある。神になる野望を抱くのに相応しい女だ」

男はミレティスの魔法攻撃も全く物とせず、静かに笑った。

「馬鹿な! そんな、このわたくしの雷光を! おのれ!!」

「くく、つれない女だ。あれほど愛し合い、この腕の中で泣きながら何度も私に忠誠を誓ったではないか」

その言葉に、ミレティスの全身から殺気が迸った。人の領域を遥かに超えた凄絶な美貌と魔力である。

「我命ず、全てを焼き尽くす稲妻よ、集いて我に仇なすものを滅せよ! エル・ヴォルテリア!!」

無数に生じた稲光が一斉に男の体に襲いかかる。神の手による断罪とも言うべき光景だった。強烈な破壊音が辺りに鳴り響く。

「滅しなさい!」

だが次の瞬間、神々しいエルフの美貌が歪んだ。

ミレティスの手から放たれた雷光が、逆流するように黒く染まっていく。

「そ、そんな! 何!? これは!!」

ミレティスは呻いた。その体からドス黒い炎が滲み出している。

男は平然とミレティスを眺めていた。

美しいエルフの神官長が激しく身を振る。

「一体これは! くっ! うああああ!!」

それは極めて残酷で煽情的な光景だった。

自らの魔力を黒く侵食されたミレティスは、全身を仰け反らして痙攣する。テネブラエが放つ黒い炎が、ミレティスにまわりつき、目、鼻、口……と、その体の至る所から侵入し、彼女の内部

を蹂躪^{じゆうりん}しているのだった。

「うぐっ！ はううう!!」

整った鼻梁が激しく震え、男達を魅了するその瞳が大きく見開かれる。腰から伸びる艶めかしい白い脚が、ローブから乱れ出て露わになった。

煌くようなブロンドの髪が漆黒に染まると、ミレティスはその場に倒れてビクンと体を震わせた。

テネブラエは邪悪な笑みを浮かべながら、女の傍に歩み寄る。

女の豊満な胸に、テネブラエと同じ染みが広がっていく。精神を侵食するかのごとく、それが黒

い竜の罫^{あざ}を形作った。

ミレティスは美しい唇を震わせて、何度も嘔吐する。

「どうだ、精神の奥まで深く入り込まれる気分は？ 千年前、一度は経験したはずだ。すぐに思い出させてやろう」

「やめる……。それ以上は……。あああっ！」

テネブラエは、ミレティスの顔を自分の方へ向けさせて低く笑った。

「どうしたエルフよ。知りたいのではなかったのか？ この『門』と呼ばれる遺跡、そしてヴェリタスの秘密を」

「く……うう」

エルフの神官長の手に再び雷光が宿った。だが、それはすぐに黒い炎に呑み込まれてしまう。

ミレティスの瞳に絶望の色が浮かんた。

「お前達は知らぬ。その魔法という力を、そもそも誰が与えたのかもな。エルフ、獣人、そして人間でさえ、ある一つの目的の為に作られた存在に過ぎぬのだ」

テネブラエのその言葉に、ミレティスは目を瞠^{みは}る。

「作られた？ 何を言っている……」

「すぐに分かる。お前が主である精霊王を裏切ってまで、その座を望んだ神という存在、それが一体、何であるのかもな」

テネブラエの形をしたその男の口から呪文の詠唱が紡がれていく。

ミレティスすら知らぬ、難解で複雑怪奇な術式が完成し、周囲一帯の空気をびりびりと鳴動させた。それに呼応して、『門』と呼ばれる巨大な遺跡の扉が淡い光を放っていく。

やがて、その表面には美しい壁画が描き出されていった。

「こ、これは――」

ミレティスの唇が震えている。

やがて、その中に隠されたものの正体がつまびらかにされるに従い、それを目にしたエルフの神官長の唇が驚きに戦慄^{せんれつ}いた。

「まさか、あれは……。一体、お前は何者なの！」
男は低く笑った。

「我が名はアデイス・フォーエン。エルフよ、いずれ時は満ちる。ただし、千年前とは違う形でな。その時、お前達は全ての真実を知ることになるだろう」



帝都を一望する小高い丘の上に、ルドアはいた。

白狼族特有の白くて大きな耳が、帝都から進撃する大軍勢の情報をつぶさに聞き取っている。その数はおよそ三万。皇帝ドルメル直属の軍団で、帝国最強と聞こえが高い黒帝師団である。

ハルヒコ達がガデルを制圧した夜、獣人族の赤き獅子王バルダス・デユカオンの命で斥候に出た小隊の一つは帝都付近に潜んでいた。

通常の行軍ならガデルからパレスティアまでは急いで二日、長ければ三日はかかる。だが白狼族の精鋭部隊は昨晩から今日の昼過ぎまで駆け続け、この地に達していた。移動能力の高さは、斥候としての優秀さを示している。ルドアはその小隊の隊長であった。

ほかの小隊は、ガデルを出て帝都の北に向かった帝国の天才軍師アルマン・エツハイマン公

爵を追っているはずだ。

「ルドア様、今何か地鳴りのようなものが……。ドルメールの軍勢によるものではありません」

ルドアは部下の言葉に頷いた。

「確かに俺にも聞こえた。帝都パレスティアの地下から響いてきたみたいだったが」

「いかがいたしましょうか」

ルドアは答える。

「まずは、バルダス様の傍におられるエハル様に、ドルメルが率いる黒帝師団の動きを伝えねばならん」

そう言うところルドアは天を見上げ、高く遠吠えをした。

それは白狼族以外には聞き取れぬ音域で大気を振るわせていく。

するとその声に反応して、数キロメートル先でも同じ遠吠えが始まった。

白狼族特有の情報伝達法である。

ヴェリタスの近隣に潜むバルダス達のところまで情報を届けようというのだ。白狼族の斥候は、そこへ至るまでの様々な経路に点在し、情報の共有を行っているのである。

ルドアは数名の部下を静かに見つめた。

「我ら獣人族は、新生ドラグリア王国のアイリーネ女王陛下をはじめ、アルドリアの勇者殿に命を

賭してでも恩を返さねばならん。俺はこれから帝都パレスティアに潜入する。黒帝師団がおらぬとはいえ、数千の帝国兵は残っているだろう。生きて帰れる保証はない」

共に来るか？

そう問いかけるルドアの眼差しを見て、屈強な白狼族の兵士達は朗らかに笑った。

「ルドア様、今さらどうしてこの命を惜しみましょうか」

「たとえ我らが死したとしても、必ずやあのお方達が我らの悲願を成し遂げてくださいます」

「その礎になれるのであれば、恐れるものなどございません」

ルドアの精悍な顔に笑みが浮かぶ。

「馬鹿な連中だ、お前達は。……よし、では行くぞ！」

ルドアはヴェリタスで待つエハルにそのことを伝えるために、再び高く遠吠えした。

時をおかずして、白狼族の戦士達が疾風のように大地を駆け抜けていく。

その先の地平には、帝国の都パレスティアを守護する城壁が張り巡らされていた。



巨大な白い塔が、天まで届くように聳え立っている。

真実の塔と呼ばれる大図書館ヴェリタスである。

同盟軍の斥候の代表を務める、新生ジェフルア王国の国王の鬘が赤く風に靡いている。それが多くの獣人族の戦士を勇気づけた。

赤き獅子王バルダス・デュカオン。獣人族最強の戦士だ。

横に付き従うのは、白狼族の長老の娘エハル。その機知故に、新生ジェフルア王国の参謀に指名された才女である。その横顔がピクンと動いた。大きな白い耳が、遠くから響いてくる何かを聞き取ったのだ。

「どうした？ エハル」

主であるバルダスの言葉に、エハルは答えた。

「バルダス様、どうやらドルメールが帝都から動き始めたようです。ルドアから報告が参りました」
バルダスが頷く。

「白狼族の遠吠えか」

「はい、我が一族にしか聞くことの出来ぬ声。密偵には最適でございます」

赤き獅子王は改めて目の前の白狼族の女を見る。美しいだけではなく才覚に溢れた女だ。

昨晩ガデルを占拠した後、ハルヒコから密偵を出すよう求められた時には、すでに自らの一族をまとめ上げていた。なんとも用意周到である。

バルダスの視線に気がついて、エハルは微笑んだ。
だが、すぐに真剣な眼差しになる。

「それにしても動きが早すぎます。アルマン・エッテハイマン公爵がドルメールを裏切り、帝都の北の二つの街道を封鎖したとしても、帝都への物資が完全に止まるまでには時間がかかります。何故、これほどまで早く帝都を出たのか」

バルダスは静かに言った。

「アルマンが挑発をしたのだろう。奴は帝国一の軍略家だ。ドルメールを手玉に取ることなど容易からう」

エハルは頷くと、もう一度白い耳をそばだてる。

「ルドア……。バルダス様、ルドアから再度の報告です。ドルメールの黒帝師団とは別に、気になることがあると。帝都の地下より不審な地響きのような音が聞こえたため、今から潜入するのとことです」

「帝都の地下だと？ どういうことだ」

エハルは首を横に振った。

「分かりません。ですが嫌な予感がします。全てがアルマン公爵の思惑通りでしたら、このヴェリタスの中に一体何があるのか……。いずれにしても、まだ暫くは時がございましょう。バルダス

様、ここは私が指揮を致します。塔の中にいる勇者様に早くこのことをお伝えください」

「うむ、分かった。そうするとしよう」

バルダスはそう言うのと、赤い風のように白く巨大な塔に向かって駆けていく。

エハルは腕に巻かれた白い飾り紐に、そっと手を置いた。娘が同盟軍の皆の無事を願って作ったものだ。見ると、結び目がほどこけている。

「リン、ミユウ待っていてね。ドルメールを倒して七年前の奴らの罪を裁く。この戦いが終われば、きっと獣人族にも平和が訪れるわ」

エハルは微笑みながら飾り紐を結び直した。だが、エハルの手はその途中で止まってしまう。

「そんな。もしや、何か悪いことでも……」

リンが編んだそれが、不吉にも途中で千切れてしまったのだ。

風に乗り、空高く舞い上がっていく娘の希望が込められた結晶を、エハルは不安な目で眺めていた。

第二話 守護者

ドラグリア帝国の邪悪な皇帝ドルメール。

その魔手^{ましゅ}の前に、滅亡寸前の絶体絶命な状況だったアルドリア王国。

だが俺——ハルヒコとアルドリアの女騎士達の活躍により、アルースの奇跡と呼ばれる戦で五万もの大軍勢を打ち破った。

その後、勝利の余韻^{よゐん}に浸る間もなく、賢王^{けんおう}として世に知られたドラグリアの前王、アフアードの娘アイリーネを旗印^{はたじろし}に新生ドラグリア王国を建国し、帝国の分断に成功する。

さらに俺達は、アルドリアと新生ドラグリア王国を中心とする同盟軍を結成し、ドルメールを追い詰めるべく帝都を目指した。

これまで入手した情報から考えると、おそらく、ドルメールを陰で操る存在は上級精霊のテネブラエだろう。奴の狙いは、千年前に行われた神と呼ばれる存在になるための儀式の再現に違いない。全てがその男の目論見^{もくろみ}通りだとすれば、俺が精霊王との賭けに勝つためには、ドルメールの息の根を止めた後、奴も倒すしかない。

その俺達は今、帝国の天才軍師アルマン・エツハイマン公爵の誘いに乗って数万年前に滅んだと伝えられる竜族の遺跡、真実の塔ヴェリタスにいた。

——奴は言った。

俺がこの世界に呼び出されたのは決して偶然ではない、と。

天空を貫くように聳え立つ巨大な白い塔。その中に作られた聖殿^{せいでん}。

額に竜族の紋章^{もんしょう}が刻まれた女、リユーシア・エレハリス。

それが輝く時、俺達はヴェリタスを守る守護者が彼女だと知ったのだった。

しかも俺は、恐るべき力を持つその女が守るこの場所で、予想もしなかった、あまりにも意外な人物との再会を果たしていた。

(この野郎……。どうしてこいつがここにいやがる)

俺は胸の内で吐き捨てながら、目の前の男の背中を見つめた。

リュオン・マナエル、いや春宮龍音^{はるみやうりゅうおん}。

こいつは間違はなく俺の親父だ。幼い頃、おふくろと俺の前から姿を消した男。

竜族の遺跡である、真実の塔ヴェリタス。その守護者リユーシア・エレハリスの剣が俺を切り裂こうとした時、突如としてこいつは現れた。俺達の最大の窮地を救うという形で。

ひらめくマントの奥に見える精悍な顔がニヤリと不敵に笑い、守護者の剣を撥ね返した。

真紅のマントに赤い装束^{しょうぞく}。手には俺の剣エルンディアスによく似た日本刀のような武器を握っている。リユーシアは、リュオンに弾かれた剣の反動を利用して体を回転させると、恐るべき速さで男の赤いマントを切り裂いた。

リュオンはそれを見て舌打ちした。その剣先は、リユーシアの全ての攻撃を受け流している。

「ちっ、高かったんだぜ、このマント。俊彦、いや……、この世界ではハルヒコか。後できっちりお前に弁償してもらうぞ！」

家族を棄て去り、失踪した男が十数年ぶりに再会した息子に発したとは思えない軽い言葉だ。

俺は苛立ちを隠そうともせず、目の前の男の背中を睨みつける。それから地面に転がったアンフアル王国の秘宝剣エルンディアスを拾い上げた。

ヴェリタスの聖堂の中で、リユーシアが再び美しい声で歌い始めた。額に刻まれた竜族の紋章の輝きが増している。それに呼応するかのように聖堂内の内壁に白い光が広がっていく。

守護者はゆっくりと口を開いた。

「……リユーオン・マナエル、久しぶりだな。このような場に姿を現すとは、さすがのお前も息子の命は惜しいらしい」

リユーシアの言葉に、リユーオンと呼ばれた男は苦笑を浮かべる。リユーシアと対峙するリユーオンの瞳は、俺同様に緋色に輝いていた。

「さて、どうかな。俺の息子なら、あれで終わりのはずがない。そうだろ、俊彦」

「その名前と呼ぶな……。あんたに息子呼ばわりされる覚えはない。後でゆっくりと事情を話してもらおうぞ」

何故、こいつがここにいいのかは分からない。

だが、確かにアルマン公爵は俺の力のことを『そなたの父親に聞け』と言っていた。

そして、俺がこの世界に召喚されたことも決して偶然ではないと。

「いいだろう。ただし、お前が生きていたらな、ハルヒコ！」

リユーオンは激しくリユーシアと剣を交わしている。俺はそれを見て、驚きよりも憤りの感情が溢れてくるのを抑えられなかった。

（こいつの前でだけは、だらしない姿を見せるのはごめんだ）

——この男の前でだけは！

「ミルファール!!」

俺の中で、上級精霊のミルファールが答える。

（ハルヒコさん、凄い力です！ 何なんですかこの力は！）

瞳が輝きを増す。

俺の中に眠る力をミルファールが引き出してくれているのだろうか。全身が緋色を超え、真紅の光に包まれていく。エルンディアスが、生きているかのように俺の手に吸い付いてくる。さらには、それに反応して、俺の右手の皮膚が赤く染まっていった。

「ハルヒコ！ 一体それは何だ!?」

アルドリア王国の聖騎士団を束ねるルビアの声が聖堂に響き渡った。

リューシアは俺の体の変化を見てとって、悠然たる笑みを浮かべる。

「ほう、その力は。面白い！ 来い小僧!!」

俺は両足に力を入れると、一瞬でリューシアとの距離を詰めていった。凄まじい速さだ。さしものリューシアも目が鋭くなる。

今までの動きとは格段に違う。リューシアが放つ無数の剣の軌道が見えた。俺はそれをすり抜けるように前へ進む。

ギイイン!!

俺の体を縦に両断しようとしたリューシアの剣戟を、エルンディアスが弾き返す。

守護者の力に対抗するだけの力が両腕に漲っていた。リューシアはわずかに体勢を崩したものの、そのまま旋回し、俺に向かって剣を真横に一閃する。

俺はエルンディアスでそれを受け止めた。凄まじい衝撃に空気が振動する。俺はその反動を利用して体を捻りながら、リューシアを切り裂こうと肉薄した。

俺の剣先がリューシアの頬に届き、浅い朱の一線を走らせた。真紅の血吹雪が辺りに舞う。その雫が聖堂の白い床に赤い飛沫を描いた。

リューシアが素早く距離を取る。それから頬を指でなぞって、静かに俺を見た。

「精霊王と、あの男以来か。このわらわの体に傷をつけるとはな。千年ぶりにわらわに血を流させ

た罪は、万死に値するぞ」

凄まじい力が、リューシアの体に集まっていく。

(これは……)

唇からは再び、美しい歌声が紡がれる。聖堂全体がその歌声に共鳴していった。

それを見たリューオン——俺の親父は、あろうことかこの状況において、自らの刀を鞘に収めてしまった。

「俊彦、ここから先はお前達だけでやらねばならん。俺が手助け出来るのはここまでだ」

「どういうことだ!」

その時、俺の傍で少女の声がした。

それはパパタと親父の傍に飛んでいく。

「リューオン、正気なの? 守護者の力はこんなものじゃないわ。いくら貴方の息子でも、一人じゃ勝てないわよ!」

その声の主を見て、アルドリア宮廷魔道騎士団長でハーフエルフのミルダが叫んだ。

「嘘……。もしかして竜?」

アウロス将軍も思わず声を上げる。

「馬鹿な!」

親父の傍で小さく羽ばたいているのは、紛れもなく太古に絶滅したはずの生き物だった。大きな瞳で俺達の方を眺めている。

リュオンは、その頭を軽く撫でて答えた。

「デアラ、もし勝てぬのなら死ぬだけだ。ここで死ぬようなら、この先に進む資格など最初からない。己の真の力に目覚めるならば今しかないのだ」

「ここから先？ 真の力だと？ あんた何を言ってるんだ!!」

俺が声を荒らげたその時、塔全体から集まった強烈な光が目前の女から放たれた。

リューシアは白い輝きを手にしていた。それ自体に生命があるように揺らめき、やがて一振りの剣となっていく。

エルンディアスによく似た刀だった。だが、その輝きは遥かに強い。リューシアの薔薇色の唇が冷たい笑みを浮かべる。

「触れ得ざるモノ、神を断罪する刃。小僧、お前にこれを手にする資格があるか、わらわに示せ！」瞬間的に俺の目の前に現れたかのように、リューシアが迫る。

エルンディアスとリューシアの持つ剣が激しくぶつかり合った。無数の突きが、俺に向かって放たれる。俺はかろうじてその攻撃をかわした。

しかし、完全には防ぎ切れず、全身に浅い傷口が広がる。今度は俺の血潮が鮮やかに聖堂の床に

紅の模様を描いていく。

（くそが、まだ速くなるのか!）

リューシアの目が真紅に輝き、その力が増す。手にした剣が守護者であるこの女と呼応しているかのようだ。

恐ろしいほどの速さの剣が、俺の体に新たな傷跡を作っていた。上段から縦一閃に切り伏せようとした女の剣が、紙一重で体をすり抜ける。攻撃を回避しても連撃は止まない。リューシアは、すかさず横薙ぎに剣を振った。

エルンディアスでそれを受け止めるが、先ほどの剣とは重さも速さも段違いだ。俺は堪らず体勢を崩してたたらを踏む。

幾度も繰り出される閃光のような打ち下ろしに、ついに剣を弾かれてしまった。その好機をリューシアが逃すはずがない。

次の瞬間、鋭い突きが喉笛に迫った。

「くっ!!」

かわしきれない。自分でもはつきり分かった。俺の首はリューシアの剣で貫かれるだろう。

（駄目か!）

その時、誰かが俺に覆いかぶさるのが見えた。

俺の体を抱き締めて、苦しげに呻くルビアの美しい顔。その背中には、深々とリュースアの剣が突き刺さっている。

「くう！　ううあああ!!」

美しい女の悲鳴が聖堂に響き渡った。ルビアの美貌が苦悶に歪む。

リュースアの剣はルビアの鎧を易々と切り裂いて、その柔肌をさらに貫いていく。

——まるで時が止まったかのようなだった。

「いやあああ!!」

ミルダの口から大きな悲鳴が上がった。

アウロスも微動だに出来ず、ただ呆然と目を瞠っている。

リュースアは、ルビアの体から悠然と剣を引き抜き、冷やかに俺達を一瞥した。

その剣先からビシヤリと真紅の血が床に飛び散った。

流れ出る血が聖堂の床を染めていき、ルビアの体がビクンと不自然に痙攣する。

「ルビア!!」

「哀れな。男の為にその命まで差し出すとは。……せめてもの情けだ。別れを告げる時間だけでもくれてやろう」

俺の叫び声に、ルビアは静かに息を吐いた。

薔薇の花びらのように美しいその唇から、一筋の血が流れていく。

ルビアは苦しげに笑った。

「これでお相手だな……。お前に救われた借りを返す前に死なれては困る」

「馬鹿、どうしてこんな真似を！」

俺はルビアの体を抱き締め、慌ててミルファールに救いを求めた。

「ミルファール!!」

「ええ、分ってます。ハルヒコさん!!」

ミルファールが飛び出し、脇目も振らずにルビアの傷口に手を当てた。

淡い光がミルファールの手から放たれる。

「お母様!!」

その横にミルダがすぐさま駆け寄って、手をかざした。強い力が傷口を癒やす。

だがそれにもかかわらず、ルビアの唇はみるみる青ざめていく。

ミルダが涙を手で拭い、ルビアの手を握り締めた。

「ルビア安心して……。死なせたりしない、貴方を絶対死なせたりしない!!」

魔力の集まったミルダの手が、ブルブルと震えている。傷口は塞がっていくのに、ルビアの肉体から命の灯が消えていくのを止めることが出来ない。赤い髪の毛は、両手を血に染め



て叫び声を上げた。

「どうして！ どうしてよ!! 何故治せないの!!」

「ミルダ落ち着きなさい。貴方の魔力が乱れていくだけよ……!」

ミルファールは涙を流しながら娘を優しく宥めた。

リューシアが俺達を見下ろして冷酷に告げる。

「神さえ断罪するこの剣で、あれほど深く切り裂かれたのだ。もはや長くはあるまい。別れを告げねば、虚しく死ぬだけだぞ」

ミルダがルビアの手を握り締めて呻いた。

「嘘よ……。嘘よ……。そんなの嘘よ!!」

ミルファールがその頬に顔を寄せて、首を横に振る。

そして静かに言った。

「もうやめなさい、ミルダ。時間がない。ハルヒコさんとのお別れをさせてあげなさい。ルビアさんは、それを望んでいるはずよ」

「そんな、だってお母様。ハルヒコ……。ルビアが」

ミルダの頬に、とめどなく涙が流れていた。

俺にはまだ、目の前の状況が信じられなかった。この世界に来て、初めて愛した女が息を引き取

ろうとしている。アルドリアの薔薇にして最強の女騎士。ともすれば、生涯の伴侶となるかもしれないなかった女の命が、俺の腕の中から零れ落ちていく。

俺はミルファールに叫んだ。

「どうしてだ！ 傷口は塞がったんだろう!? ミルファール！」

「……ハルヒコさん。落ち着いてください！ もうあまり時間がありません」

——本当に、もはや打つ手はないのか？

顔を背けるミルファールを見て、俺は怒りに任せて手にした剣を床に突き立てた。

激しい金属音が聖堂に響く。

——俺はこうしてルビアが死にゆくのを、ただ手をこまねいて見ていることしか出来ないのか？

「ハルヒコ……」

自分の情けなさに、不甲斐ない己の非力さに、怒りで全身が戦慄していた。腹の底から湧き上がる震えを必死に抑えようと、俺は剣の柄を強く握り締める。

俺のそんな様子を察したのか、美しい女騎士は閉じていた顔をゆつくりと開いた。

「ルビア……。お前」

白く震える指先が、俺の頬をなぞっていく。

「騒ぐな……。私はマフルージェ王女に言った。ハルヒコ、お前は変わらないと。たとえ私が死ん

だとしても、私が生きた証に恥じぬ男のままで私の魂と共に生きるだろう。そう信じている、と」

美しい瞳が痛みを堪えて揺れている。

俺は、震えるルビアの手をしっかりと握り締めた。

ルビアが静かに微笑む。

「お前は救ってくれた。アルドリアを、リーア様を。お前は、私にとって誰にも勝る英雄だ」

「分かった。……もう喋るな、ルビア」

ルビアは俺の胸に顔を埋めた。そしてうわ言のように囁いた。

「……私は誇りに思う。お前を愛せたこと、共に生きることが出来たことを。それが私にとっての

何よりの手向けだ」

先ほどまで俺の顔を触っていたルビアの手が、だらりと力なく垂れ下がった。ルビアの体から力

が失われていくのが分かる。

俺の瞳から涙が溢れ、頬を流れ落ちた。

頰れるその体を支えながら、俺は静かに聖堂の床に横たえた。煌くようなブロンドの髪が、白い

石造りの床に金色の小さな野原を作る。その姿は何よりも美しく、俺の心の中に刻まれていった。

（ルビア……）

俺はその場に立ち尽くしていた。